

中等教育と高等教育をつなぐ日本語表現教育の試み

秋山 英治

(愛媛大学附属高等学校)

Trial of Joint Middle and Secondary School Education Regarding Japanese Language Education

Eiji AKIYAMA

(Ehime University Senior High School)

1. はじめに

現在、大学生の日本語力の低下が叫ばれ、多くの大学で「日本語表現教育」が行われている。大学における日本語表現教育に関するアンケート調査の結果を報告した清水・秋山（2010）でも、半数を超える大学で日本語表現教育が行われていることが述べられている。

このように現在盛んに行われている日本語表現教育であるが、実施担当者の多くは、どのようなことを行っていけば良いのかわからず試行錯誤している。日本語表現教育の導入は先進的な取組を行った大学でも1990年頃からであり、20年程度しかその歴史がない。大半の大学は1990年代後半以降からの導入で、10年に満たない大学も多い。そのため、日本語表現教育には、確立した教授法やテキストがなく、担当者によって実施内容に差が見られるという問題がある。

また、大学で行われている教育内容は、中等教育からのつながりを意識した内容となっていないという問題もある。確かに、高等教育において、初年次教育やリメディアル教育が重視されるようになってきている。しかし、大学教員の多くは、学生が大学入学までにどのような教育を受けてきたのかを知らないため、中等教育とのつながりを欠いた教育となりがちである¹⁾。

これらの問題を解決するためには、中等教育と高等教育をつなぐ日本語表現教育が必要である。本稿では、愛媛大学附属高等学校及び愛媛大学での実践を踏まえ、中等教育と高等教育をつなぐ日本語表現教育に4コマ漫画をテキストとして用いた教授法が有効であることを述べる。

2. 中等教育と高等教育をつなぐテキストと教授法

2.1 テキストの開発

中等教育と高等教育をつなぐ日本語表現教育を行うために、平成20年度愛媛大学教育改革促進事業（愛大GP）「高大連携による『日本語ラーニングの開発』」（代表者：清水史）において、筆者も実施担当者として参加し、「4コマ漫画」をテキストとした教授法の開発に携った。

なぜ4コマ漫画をテキストとしたのか。その理由は、主に次の5点である。

- ① 楽しんで取り組める
- ② 絵（視覚的情報）があるので、状況や登場人物の心情をイメージしやすい
- ③ 子どもから大人まで、さまざまなレベルに対応できる
- ④ 多様な力を養うことができる
- ⑤ 一話完結型であるので、授業時間に合わせやすい

4コマ漫画は、生徒や学生が意欲を持ち、なおかつ効率よく学ぶことができるテキストとして、非常に有効と考えられる。

2.2 テキスト・教授法

今回の実践では、高等学校・大学ともに同じテキスト・教授法を用いた。

テキストは、現在朝日新聞朝刊に連載されている4コマ漫画「ののちゃん」の第707話（図1）を用いた。4コマ目のセリフ（オチ）を抜き、そのセリフを考えるとという実践である。



図1 「ののちゃん」第707話
©いしいひさいち『ののちゃん全集2』

原作では、4コマ目のセリフは、「ただいまルスでおます。ピーちゅう音のあとにおはなしてください。」となっている。おにいちゃんの前に伯母さんからの電話をとったののちゃんが、伯母さんの電話に対してどのような対応をしていたかを考えさせる4コマ漫画である。

実践における活動は、次の通りである。

- ① 4コマ目のセリフを抜いた4コマ漫画(図1)を配布する。
- ② 4コマ目に入るセリフを個人で考える。
- ③ グループを編成する。
高等学校：6人編成、全19グループ
大学：4人編成、全8グループ
- ④ グループで話し合いをさせ、グループとしてのセリフを決定させる。
- ⑤ 各グループのセリフを板書させる。
- ⑥ 4コマ目に入るセリフとして一番良いと思ったグループを選ばせ、評価シートに書かせる。また、なぜそのセリフを選んだのか、理由についても評価シートに書かせ、それらを提出させる。
- ⑦ 提出された評価シートを整理し、高い評価を得ているグループのセリフや選ばれた理由などをコメントする。
- ⑧ 原作のセリフを示し、作者のねらいについて解説する。

- ⑨ 振り返りシートに活動を通して気付いたことや感想などを書かせる。

2.3 大学での実践

(1) 授業の概要

愛媛大学法文学部人文学科(昼間主コース・夜間主コース)では、1997年より「広く高度な教養と問題解決能力を備えた人材を育成すること」を目標に、2年次必修科目「日本語表現Ⅰ」(前学期)・「日本語表現Ⅱ」(後学期)を開講している。このうち「書く」ことに重点を置いた「日本語表現Ⅰ」(夜間主コース)で、4コマ漫画をテキストとして用いた教授法を実践した。授業科目・受講者数・実施日等を示すと、次のようになる。

- ① 授業科目：日本語表現Ⅰ(夜間主コース)
- ② 受講者数：31人(一部3年生も含む)
- ③ 実施日：2011年5月7日
- ④ T A：大学院生1人

(2) 各グループのセリフ

グループワークを通して大学生が考えたセリフを、各セリフの評価人数と合わせて示すと、表1ようになる。大学では、どのグループがどのようなセリフを考えたかがわからないようにした。また、原作のセリフで方言が使われているので、一部変更したもの(大◎)を含めた。

4コマ目のセリフを考えるにあたっては、次の4点に注意する必要がある。

- (1) 1コマ目から4コマ目までのセリフの流れに矛盾はないか(論理展開として矛盾していないか)
- (2) 絵(視覚的情報)が把握できているか
- (3) 3コマ目までとつながっていながらも、オチが意外なものとなっているか
- (4) 表記への配慮がなされているか²⁾

これら4つの注意点をおさえた原作(大◎)と同様のセリフは、唯一大◎の「ただ今、留守にしております。ピーという……。」だけで、しかも、評価した人数は、3人であった。原作(大◎)と合わせても5人しかおらず、大学生が4コマ漫画を正確に読解できていないことがわかる。

それは、一番高く評価されたセリフが、大◎の「ハイ、いえハア、お兄ちゃんよりは。」(16人)であることから言える。このセリフを選んだ理由として、「4コマ目のおにいちゃんが困った表情は、ののちゃんが2コマ目のおにいちゃんの真似をして馬鹿にしたことによると考えられるから」という意見が最も多くあがっており、注意点(2)絵の情報についてはある程度把握できている。しかし、4コマ目のオチの部分に2コマ目で一度使われたものとはほぼ同じセリフがきており、注意点(3)オチの意外性はおさえられていない。

その他のセリフや評価を見ても、4つの注意点すべてをおさえられていない。そこで、大㊤「ただいまルスです。ピーという音のあとにおはなしく下さい。」が原作のセリフであること（方言が使われていること）を示し、なぜ原作がこのセリフなのか、4つの注意点を踏まえて解説した。

(3) 授業の振り返り

授業の最後に、振り返りシートに活動を通して気付いたことや感想などを書かせた。学生のコメントをいくつか以下に示してみよう。

- ・4コマ漫画が題材だったので、最初は簡単にできると思っていたが、実際に考えてみると非常に奥が深いことに気付いた。
- ・漫画すら正確に読めていないことに気付いた。
- ・漫画に限らず、さまざまな文字情報・視覚的情報に対して、普段いかに適当に接しているかがよくわかった。これからは、もっとさまざまな情報に対して丁寧に接することが必要だと思った。
- ・実際の生活では、文字と絵の両方がよく使われているので、メディア・リテラシーの視点が非常に重要だと実感した。
- ・なにげなく読む漫画も実はよく考えられて作られているということに気付いた。
- ・漫画を使った授業だったので、身構えることなく楽しく取り組むことができた。
- ・人と話すのは得意ではないが、題材が漫画だったので、自然に話し合いができた。
- ・自分が考えていたものと他の人が考えていたものが違うということがグループワークによって知ることができた。
- ・最初は「書く」ことに、話し合いは必要ないと思っていたが、グループワークを通して、他人の考えを知り、自分の考えを改めて見つめ直すことができた。「書く」ことにも話し合いは効果的だと実感した。

これらの意見から、今回の実践を通して、大学生が多くこのことに気づき、学びを深めていったことがわかる。

2.4 高等学校での実践

(1) 授業の概要

愛媛大学附属高等学校は、平成20年農学部附属農業高等学校からの改組により発足した。それに伴いカリキュラムの見直しが行われ、高大連携の充実が図られた。高校2年次の高大連携科目「キャリアプランニング」では、平成21年度より、キャリア形成において、日本語力向上が不可欠であるという考えに基づき、日本語表現教育プログラム「日本語ラーニング」を開設している。法文学部人文学科の清水史氏を中心に附属高等学校教員とが協働して実施している。今回は、その「日本語ラーニング」の中で、筆者が4コマ漫画をテキストとして用いた教授法を実践した。授業科目・受講者数・実施日等を示すと、次のようになる。



図2 授業風景(1) グループワーク

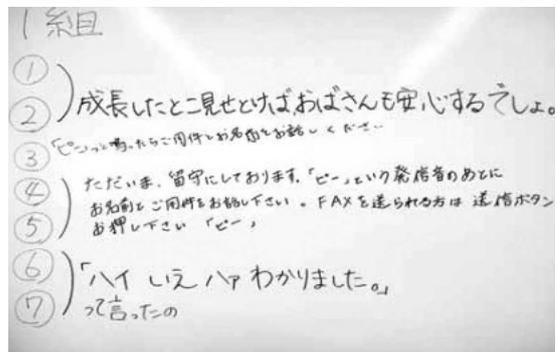


図3 授業風景(2) 板書例

表1 大学生が考えたセリフ

グループ	セリフ	評価人数
大㊤	ハア いえハア わかりました。	1
大㊤	今のおにいちゃんでしょう。電話の対応がきちんとできるのね。	2
大㊤	ただいまルスです。ピーという音のあとにおはなしく下さい。	2
大㊤	ハイ、いえハア、お兄ちゃんよりは。	16
大㊤	ただ今、留守にしております。ピーという……。	3
大㊤	鼻が詰まって大人っぽい声に聞こえたんじゃない？	0
大㊤	このくらいあたしにかかればちよろいもんよ。	0
大㊤	お母さんがね、いつもこーやってるからまねしたの。	6
大㊤	お兄ちゃんは、就職できたのかしら？だってさ。	1

- ① 授業科目：日本語ラーニング
- ② 受講者数：86人³⁾
- ③ 実施日：2011年6月3日
- ④ T T：附属高校教員5人

(2) 各グループのセリフ

グループワークを通して高校生が考えたセリフを、各セリフの評価人数と合わせて示すと、表2のようになる。高等学校での実践では、グループ数が多いため、大学での実践と異なり、原作のセリフを各グループのセリフの中に入れていなかった。

原作と同様に4つの注意点を示したセリフは、高⑥の「『ピー』っと鳴ったらご用件とお名前をお話してください。」である。しかし、大学生と同様に、このセリフを評価した人数は少なく、正確に読解できていないことがわかる。高③の「ただいま、留守にしております。『ピー』という発信音のあとにお名前とご用件をお話し下さい。FAXを送られる方は送信ボタンをお押し下さい。『ピー』も原作に近いが、文字数が多く吹き出しの大きさに適していない。

一番評価の高いセリフは、高⑩の「いつも彼と電話してるもん。」である。選んだ理由の大半は「予想外のセリフで驚いた」で、奇抜な発想を評価している。しかし、このセリフでは、1コマ目からの流れに合わない。高校生の評価が奇抜さに引きずられ、2.3(1)で示した4つの注意点を示されていないことがわかる。

そこで、各グループのセリフについてコメントし、その後原作のセリフ、そのセリフが入る理由について、4つの注意点を踏まえて解説した。

(3) 授業の振り返り

授業の最後に、振り返りシートに活動を通して気付いたことや感想などを書かせた。生徒のコメントをいくつか以下に示してみよう。

- ・4コマ漫画のセリフにも、1コマ1コマきちんと役割があることに気付いた。
- ・たった4コマという短い中にいろいろなことが考えられて作られていることがわかった。また、言葉のみのつながりだけでなく、絵からの情報も大事にされていることもわかり、とてもおもしろい授業だった。
- ・4コマ漫画のセリフを考えることによって、想像力・表現力を鍛えることができたと思う。
- ・4コマ漫画ということで簡単にできると思っていたが、いざ考えてみるとなかなか思いつかず、難しかった。
- ・見たものを理解し、表現することはとても難しいことに気付いた。
- ・原作のセリフを知って、ああなるほどと思った。漫画がきちんと読めていないことに気付いた。
- ・漫画が題材だったので、取り組みやすかった。情報ののがさず理解する必要があると思った。

これらの意見から、4コマ漫画をテキストとして用いた教授法によって、大学生だけでなく高校生も学びを深めることができたことがわかる。

今回、高等学校・大学ともに同じ4コマ漫画をテキストとした教授法を実践したが、ともにこのテキスト・教授法を通して学びを深めていくことができた。高校生は大学生より知識が乏しく、視野も狭いため、学びに差が生じる部

表2 高校生が考えたセリフ

グループ	セリフ	評価人数
高④	成長したと見せとけば、おばさんも安心するでしょ。	0
高⑥	「ピー」っと鳴ったらご用件とお名前をお話してください。	3
高③	ただいま、留守にしております。「ピー」という発信音のあとにお名前とご用件をお話し下さい。FAXを送られる方は送信ボタンをお押し下さい。「ピー」	11
高④	「ハイ いえ ハア わかりました。」って言ったの。	12
高⑤	あっそ。	1
高①	あんな対応、鼻ほじりながらでも出来るわよ。	4
高⑧	私「はい」しか言ってないけど。	3
高④	赤ちゃんじゃないんだから電話の応対ぐらいできるよ。	0
高①	電話とかまちよーだし。ホジホジ…。	10
高①	のちゃんをバカにしないで!!	0
高⑫	大きな声でしゃべっただけだよ。	1
高①	お兄ちゃんより上手くできたと思うけど…。	1
高⑩	私、3歳児の設定だから。	0
高⑩	ハイハイ言ってただけなんだけどね。	1
高⑩	お兄ちゃんとは違うからね。	6
高⑩	いつも彼と電話してるもん。	30
高④	伯母さんキライだから、早くお兄ちゃんに変わってほしかったの。	3

分もあるが、その差を踏まえておけば、同じテキスト・教授法でも、実践可能となることが明らかになった⁴⁾。

3. おわりに

現在多くの大学で、初年次教育やリメディアル教育が行われているが、それらを充実したものにするには、中等教育から高等教育への学びをスムーズに移行させるという視点が不可欠である。大学がユニバーサル化している今だからこそ、従来別々のものと考えられ、つながりが希薄であった中等教育と高等教育をつなげていく必要がある。

本稿で述べた愛媛大学及び愛媛大学附属高等学校での実践は、上記の視点に基づき、日本語表現教育において、4コマ漫画をテキストとして用いた教授法を試みたものである。これらの実践によって、一つのテキスト・教授法で中等教育から高等教育までカバーできることが明らかになった。今後さらに中等教育と高等教育とのつながりを強化していくためには、本稿のような試みを積極的に行っていく必要があるのではないだろうか。

注

- 1) 日本リメディアル教育学会・日本語部会では、第7回全国大会（2011年9月3日）で、「大学の学びに必要な文章力の養成」をテーマにシンポジウムを行った（筆者もシンポジストとして参加した）。その企画の趣旨に、「大学の教員は、文章力の低下について問題にはするが、学生が大学入学までにどのような文章教育を受けてきたかを知らない」とある（佐藤2011）。これは文章教育における指摘であるが、文章教育以外についても同様のことが考えられる。
- 2) 原作のセリフの中で、「ルス」とカタカナが使われているが、これは、のちゃんが小学校3年生（9歳）であるために、「留守」の「留」という漢字（小学校5年生配当漢字）を学習していないことによる。1コマ目の「伯母」の「伯」も、小学校で学習する漢字（教育漢字）以外の漢字であるが、ひらがな（「おばさん」）やカタカナ（「オバサン」）で表記すると、親類か（親類においても、「叔母」か、それとも「伯母」か）、それとも近所の人かの区別がつかなくなるため漢字で表記されている。
- 3) その他、表記面として、吹き出しに適当な文字数などについても注意しなければならない。
- 3) 通常日本語ラーニングは、2年生全員125人が一堂に会する一斉授業を行っているが、当日は、高校総体愛媛県中予地区大会と重なり、40人ほど不在であった。そこで、人数の少ないグループ2グループが集まり、1グループを編成した。
- 4) ただし、課題も残されている。大学の実践は、受講生が31人と少人数のため、筆者及びTA1人の計2人で実施することができたが、高等学校の実践では、受講生が86人のため、附属高校教員5人のサポートを受け、計6人で実施した。普段から高大連携授業などでグループワークやディスカッションに慣れている附属高校生も、作業時間に遅速があり、全体

を統一的に実施するのが困難な場面も見られた。従来から指摘されているように、体験型の日本語表現教育を実施する上でいかに少人数授業が実施できるかが課題として残されている。

引用文献

- ©いしいひさいち（2004）『ののちゃん全集2』徳間書店スタジオジブリ事業本部
- 佐藤尚子（2011）「企画の趣旨」（日本リメディアル教育学会第7回大会・日本語部会企画『大学の学びに必要な文章力の養成を考える（大学生はどのような文章力を有して、大学に入学をしてきているのか）』）『日本リメディアル教育学会第7回全国大会予稿集』pp.155
- 清水史・秋山英治（2010）「高等教育における日本語リテラシー教育の現状と課題」『愛媛大学法文学部論集人文科学篇』第28号、pp.83-116

付 記

本稿は、平成20年度愛媛大学教育改革促進事業（愛大GP）「高大連携による『日本語ラーニングの開発』」（代表者：清水史）、及び平成22年度愛媛大学教育改革促進事業（愛大GP）「高大連携による『日本語ラーニング』ジェネリックプランの構築」（代表者：秋山英治）による成果の一部である。